

## 若い教師のために⑥

### 遊ぶ

学力研常任委員 深沢 英雄

#### 一、子どもと遊ぶ

小学校の教師になった時に、新任二人が先輩から一番最初に言われたことは、「授業は下手なのは分かっている。子どもとつながらするために、まずは、休み時間子どもと遊べ。休み時間に職員室にいて、お茶など飲んでいたらダメだ。運動場に出ろ。」でした。若いということは、体力があります。若いということは子どもに近いということです。体力的にも、精神的にもこの時期に子どもと一緒に遊ぶことです。

子どもに好かれなければ指導は入りません。子どもに好かれていれば、多少まずい指導も入っていきます。だから、教師は子どもに好かれ信頼され、できれば尊敬されなければなりません。子どもといっしょに遊べば、自然に「先生、好

き」になっていきます。このように、子どもに好かれる教師の力を「人格的力量」と呼ばれてきましたが、この力がないと学級づくりも授業もほんとうのところで成立しません。

#### 二、「友達」先生と「教師くさい」先生

子どもは先生と遊ぶのが大好きです。若い先生の場合、ほとんどの子は先生について一緒に運動場にでようとします。でも、大学生の教育実習で子どもと遊ぶのと、担任した子と遊ぶのとは違います。ほとんどの先生を志している人は、子どものことが好きで、子どもと仲良くなりたいたい、好かれたいと思っています。好かれたり、信頼してもらいたいの入り口の二つが遊びです。

しかし、若い先生の落とし穴が2つあります。

一つは、「友達」のような関係になってしまふことです。友達のようなフレンドリーさは必要ですが、子どもに「あまり、強くしかると嫌われるかな。せつかく子どもが言っているんだから、これぐらいいいんじゃないか。」とついつい迎合してしまいます。子どもの方は手慣れたもので、特に4月は「アドバルン」と言われていますが、「この先生はどの程度許してくれるかな。」と探ってくるのです。その時に「ダメなことはダメとしつかりと言え厳しさが無い」と付け込まれてしまいます。

もう一つは、「教師らしく」ふるまおうとして失敗するケースがあります。教師の力量は、知的優位性にありますが、それだけでは子どもは動きません。ありあまる知識があっても、すぐれた教師にはなれないのです。教師には、知識プラスアルファの力量が必要です。そのプラスアルファの力量は遊びの中で培われます。若い教師の中には、自分が子ども時代、集団の中であそんだ経験をもたない先生もいます。ごく親しい何人かの友人と静かにあそんだ経験しがなく、ムレをなし

て、いたずらした経験をもたない教師がふえてきて、真面目だが子どもとどういう距離を保つたらいいか、迷ってしまう若い先生もいます。

### 三、ガキ大将先生に

遊んでくれる先生は「大好き」です。

子どもたちは、集団であそんだ経験が乏しい子が多くなっています。だから、自分たちよりからだの大きい知恵のある先生が、ガキ大将になってあそんでくれるのだから、こんな楽しいことはありません。「安心・安全」だからです。昔ならガキ大将が決めたルールがありました。今は先生が決めたルールがありました。今は先生がルールを示し、自分勝手なことをしたら、注意し、時には許してやることを見せ、自分たちが気持ちよく遊ぶにはどうしたらいいか、教師がモデルとなればいいのです。そうしながら、遊びの楽しさを伝え、やがて、自らの力で遊べるように育てていくのが目標です。

教師がガキ大将になって子どものレク指導をしていくと、だんだんと子どもが見えてきます。教室にすわって勉強して

いるときとはちがったそれぞれの子どものよさが発見できます。子どもは一人ひとり個性的な存在だから、勉強は苦手だが、遊びになるとがぜんはりきる子どもも出てくるのです。だから、学校は多面的な活動を通して、子どもの個性を引き出すようにしなければなりません。遊びは、その好例です。勉強ができるできないという価値だけで子どもを見ないということが大切です。

子どもが見えてくると、子どもの心に共感することができます。教師が教師のヨロイカブトに身をかため肩ひじはつて「自分は教師だ」と一段高いところでいるかぎり、子どもは見えないし、子どもに共感することはできません。

遊んでいるときは、子どもの本音がいっぱい出てきます。教室ではおとなしい子が、遊びのときは元気だったり、表情ががらりと変わる子がいます。心が解放されているのでしょうか。お父さんやお母さんのこと、家でのこと、友達のこと時には、子どものレベルにおり、同じ目の高さに立ち、子どもの心にわが心を寄せあうことによつ

て、子どもの心に共感することができるともにあそびながら、喜びや楽しみをわかちあうことができれば、次に、苦しみや悲しみをわかちあうこともできるようになると思います。

### 三、同僚と遊ぶ

職場が多忙になっています。そのためか教師相互の人間関係がぎすぎすしている職場もあります。

学級活動で子どもたちの感情的連帯をはかるのに、もつとも力を発揮するのは文化活動・スポーツ活動です。遊びです。学級のみんなで遊ぶと楽しくなり、その楽しい感情を分かち合いながら、心が通いあつていきます。これは大人も同じです。教職員集団は、たえず、感情的に連帯する活動に意図的にとりくむことが大事です。

自分も楽しみながら、なんでもいい、みんなでわいわい遊びながら、人と人との距離を縮め、職場の人間関係が良好になるように、若い先生は、その中に入つてほしいと思います。